

十一月己卯、天皇、高円野に遊獵する時に、  
小さき獸都里の中に泄走す。ここに  
適に勇士に値ひ、生きながらにして獲られ  
ぬ。即ちこの獸を以て御在所に献上るに副  
ふる歌一首

一〇二八番

ますらをの 高円山に 迫めたれば 里に下り来  
る むざさびそこれ

十二年庚辰の冬十月、大宰少貳藤原朝臣広嗣  
の謀反けむとして発軍するに依りて、伊勢  
国に幸す時に、河口の行宮にして、内舍人  
大伴宿禰家持の作る歌一首

一〇二九番

河口の 野辺に廬りて 夜の経れば 妹が手本し  
思ほゆるかも

天皇の御製歌一首

一〇三〇番

妹に恋ひ 吾の松原 見渡せば 潮干の瀉に 鶴  
鳴き渡る